

マレーシア郷土史事情

東條哲郎²

0. はじめに

2008年7月、マラッカとペナンがユネスコ世界文化遺産(世界遺産)に登録されました。世界遺産登録に向けた建築物の保存活動や市民への啓蒙活動が両都市を中心に行われ、登録前後から、マラッカ史やペナン史といった地域の歴史が書店にも現れるようになっていきます。また、両都市に数多く住む人々に関する著作もいくつも出されています。これらの活動や出版を主に担っているのが、地域の歴史愛好者、即ち郷土史家です。彼らは、自身の生まれ育った街の歴史や祖先の系譜などを、聞き取りや資料収集などをもとに記述しています。

こういった活動は、マレーシア全域で広まり、著者が主な研究対象としているペラでも近年多くの著作が出されています。このエッセイでは、第一節でペラにおいて開館された歴史的な建築物などの保存・展示を行っている施設を、第二節で近年出版された地域史や一族史を扱った著作を、そして第三節で、これらの施設や著作を生み出す背景となっている活動組織をそれぞれ紹介します。

1. 郷土博物館

1.1 ゴペン博物館(Pertubuhan Pengurusan Muzium Gopeng: 務邊文物館)¹

ゴペン Gopeng はペラ州の州都イポーから南に約 20km にある小さな町です。現在は国道 1 号線沿いの静かな町ですが、イポーを含むキン

タ川流域が世界最大の錫採掘地として栄えた 19 世紀後半から 20 世紀前半、ゴペンは多くの商人などが集まる鉱業都市として賑わっていました。

町の中心部、国道から東側に入った道のショップハウスを改築する形で 2009 年に開館したのが、ゴペン博物館です。この博物館開館の中心となった彭西康(Phang See Kong)氏は、国立公文書館や個人のコレクションから町の風景写真や有力者の肖像写真を 2000 枚ほど集め、年代・世代ごとに展示するとともに、町の古い道路標識や看板、時計や陶磁器などの日用品、この町の繁栄を支えた錫とゴムの採掘・採取道具などを町の人々などから収集し、展示しています。開館したばかりということもあり、また彭西康氏の個人の努力によるところが多いため、展示物に関する説明書きなどが少なく、収集物をそのまま展示しているという感は否めませんが、ゴペンの人々が暮らしていた生活風景を感じることもできる博物館です。

1.2 シビル診療所とパパン歴史ギャラリー(Sybil's Clinic & Papan History Gallery)³

イポーから西に車で約 10km のパパンという街の一軒のショップハウスが歴史ギャラリーとして公開されています。助産婦であったシビル Sybil Karthigasu は、医師である夫とともに戦前よりイポーで開業していました。日本軍がマレー半島に進軍すると、それを避ける形でパパンに移住、

¹ 住所：28, Jalan Eu Kong, 31600 Gopeng, Perak

² 東京大学大学院博士課程単位取得退学。
E-mail: tetsuotojo@hotmail.com

³ 住所：74, Jalan Besar, Papan Lama, 31550 Pusing, Kinta Valley, Perak

診療を続けました。戦時下、日本軍による情報統制がなされている中で、彼女は連合軍のラジオ放送を傍受したり、抗日運動の兵士たちの治療を行ったりしていました。そのような活動が日本軍に知られるところになると、日本軍に逮捕されましたが、その抑留生活に耐え、戦後その経緯を自伝として出版しました¹。

この話に強い関心を持ったイポーの実業家ロー・シアク・ホン Law Siak Hong 氏は、空き家になっていたこの家を買取り、時間をかけて修繕すると共に、ゆかりの品々や戦時下の生活用品などを集め、多くの市民に当時の歴史を伝えるため 2006 年に歴史ギャラリーとして公開しました。

パパンは、スマトラ島から 19 世紀に移住してきたマンダリン族の有力者ラジャ・ビラ (Raja Bilah) 一族が拠点を構えていたこととしても知られています。彼らの活動は、マンダリン族の血を引くアブドゥル・ラザク・ルビス (Abudur-Razzaq Lubis) 氏とその妻でありプラナカン華人であるクー・サルマ・ナスジョン (Khoo Salma Nasution) 女史の共著で出版されており²、また、彼らの屋敷地と建物群が一般に公開すべく整備が進んでいます。

2. 近年の出版物紹介

2.1 Abudur-Razzaq Lubis; Khoo Salma Nasution. 2005. *Kinta Valley: Pioneering Malaysia's Modern Development*. Ipoh :

¹ Sybil Karthigasu. 1983. *No Dram of Mercy*. Singapore: Oxford University Press

² Abudur-Razzaq Lubis; Khoo Salma Nasution. 2003. *Raja Bilah and the Mandalings in Perak: 1875-1911*. KL : MBRAS. 同書に関しては、JAMS ニュース・レター 第 29 号 (2004 年 7 月) 掲載の坪井祐司氏の新刊紹介に詳しい。

Perak Academy

第 1 節でマンダリン族に関する著書を出版したアブドゥル・ラザク・ルビス氏とクー・サルマ・ナスジョン女史による著作です。キンタ川流域の各地域や都市の歴史をイギリス植民地期の行政文書や当時の写真をもとに記述した作品です。特に、地方都市に関しては一次史料を数多く用いて記述しており、キンタ地域史としてだけでなく、資料集としての意味も非常に高い作品となっています。

2.2 Ho Tak Ming. 2005. *Generations: The Story of Batu Gajah*. Ipoh: Perak Academy

錫鉱業が盛んになっていった 19 世紀後半、キンタ川流域の行政府が置かれたのがバトゥ・ガジャ Batu Gajah です (行政府は後にイポーに移転)。著者のホー・タク・ミン Ho Tak Ming 氏はバトゥ・ガジャに生まれ育ち、この地で 30 年近く開業医として働く傍らで、郷土史家としても活躍しています。この作品は、錫採掘で栄えたこの町の歴史を、自身の一族史とその周辺で活躍する鉱床経営者やゴム・プランテーション経営者、教育関係者などに関するエピソードを中心に、街区や建築物の成立についても記述しており、一地方都市から 20 世紀初頭のマレー半島の歴史を見るという点でも興味深い一冊です。

2.3 李永球. 2003. 『移國: 太平華裔歴史人物集』(ペナン: 南洋民間文化)

著者の李永球氏はタイピン (Taiping: 太平) で生まれ、同地の中等学校を卒業後、新聞記者として長く活動した後、フリーの記者として、また作家として活動を行っている福建系の華人です。タイピンは、1840 年代に錫鉱床が発見され、錫鉱

業と共に発達した町です。

この本は、列伝形式をとっており、ペラの初代甲必丹である鄭景貴(Chung Keng Kwee)を初めとするタイピンで活躍した約100人の華人の略歴や活動を関連する写真とともに紹介しています。

3. 活動組織

3.1 ペラ・アカデミー(Perak Academy)¹

ペラ・アカデミーはペラにおける知識や文化の振興を図るために組織された NGO で、森林保護や開発、地域史などに関する会議を開催するほか、ペラに関する多様な分野の出版物を発行しています。同会の会長を務めるアブドゥッラー・ファズリ(Dato' Dr Abdullah Fadzil bin Che Wan)氏は、かつてキンタ川流域地域の首長であったダト・パンリマ・キンタ Dato Panglima Kinta の直系の子孫にあたり、同会のメンバーにはイポーを中心とするペラの有力者が数多く参加する他、ペラのスルタン家からの援助を受けており、講演や出版などの活動を支えています。

3.2 ペラ歴史遺産会(Perak Heritage Society)²

一方、ペラ・アカデミーと連携し、草の根レベルでこれらの人々の活動を支えている組織の1つにペラ歴史遺産会があります。この組織は、2003年8月、自然や建築物などの“Hometown Heritage”に対する地元の人々の理解を深め、

これらを保護するために成立した NGO です。会長は、パンパンのシビル女史の住宅を歴史ギャラリーとして開放しているロー・シアク・ホン氏、副会長はペラ州で長く図書館司書として勤めているムハメド・タイプ(Mohamed Taib bin Mohamed)氏が務めており、所属している会員も多種多様な出自や職業の人々で成り立っています。同会では、ペラ州内の各都市や史跡、自然をめぐる日帰りツアーや会報誌の発行の他、歴史的な建築物や街区、水道管などの近代インフラの保存活動を行っています。

4. 終わりに

これらの活動の背景には、多くの自然や歴史的な建築物が現在消失しつつあるということがあげられます。自然環境では、近年、アブラヤシ栽培が盛んになり、多くの森林が急速にアブラヤシ林に変わりつつあります。ショップハウスや宗教施設などの歴史建築物の中には、建築から100年以上経つものも数多くあります。これらの建物は熱帯性気候のため保全が難しさや、住み易さ・利便性さという面からの再開発に直面し、徐々に失われつつあります。マラッカとペナンが世界遺産に登録されたことにより、これらの活動はより広く知られるようになってきました。

マレーシアという国の枠組みを設け全体を正面から取り上げるのではなく、郷土史家の活動と連携し、ある地域の歴史を詳細に分析するにより、マレーシアないしマレー世界を理解していくことの重要性を彼らの活動を通じて日々感じております。

¹ No1, Jalan Lasam, 30350 Ipoh

Homepage: www.perakacademy.com,

E-mail: perak_academy@yahoo.co.uk

² 85C, Jalan Sultan Abdul Jalil, 30300 Ipoh,

Perak

E-mail: perakheritage@hotmail.com